

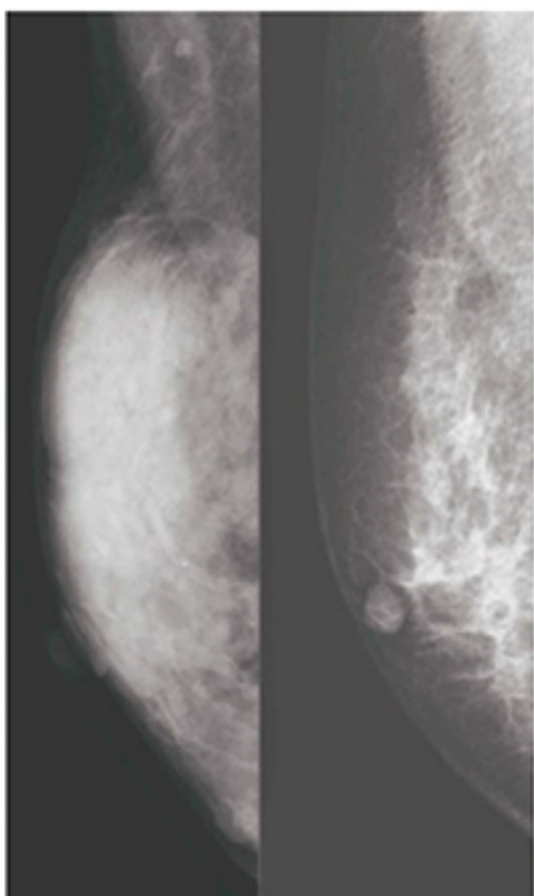
西村 令喜さんに聞く

「乳がんはどう診断しますか。」
「マンモグラフィや超音波検査を行い、最終的には、細胞診、針生検によって、がん細胞の存在を確認する必要があります。」

「高濃度乳房とは何ですか。」

「高濃度乳房はデンスブレスト (dense breast) といい、マンモグラフィで見られる所見の一つで、これ自体は異常ではありません。」

「乳房は、乳汁をつくり、分泌する乳腺組織と、これを支える脂肪組織によって構成されています。マンモグラフィでは、脂肪が多いほど全体に黒っぽく透けて写り、乳腺組織が多いほど全体に白っぽく塊のように写ります。一方、がん細胞が壊死すると、石灰化して同様に白く写りますので、異常を見つけにくい場合があります。」



マンモグラフィによる高濃度乳房(左)と不均一高濃度乳房(右)の画像。乳腺密度が高いと、乳がんの病変を見つけにくい場合がある。

(くまもと森都総合病院提供)

高濃度乳房 病変発見、困難な場合も



◇にしむら・れいき 山口大医学部卒、熊本大大学院医学研究科修了。熊本市民病院副院長を経て、2015年から現職。日本乳癌学会(第20回学会会長)、日本乳癌検診学会、日本臨床外科学会の評議員。

「乳腺濃度のタイプは。」

「乳腺濃度は個人差が大きく、年齢や体質、授乳の有無やホルモン環境に左右されます。乳腺組織と脂肪組織の量をもとに、乳腺密度が高い順に、①高濃度②不均一高濃度③散在性④脂肪性—に分類されます。高濃度は、約10%に見られます。日本人は欧米に比べて高濃度乳房の割合がかなり高く、50歳以下では80%近くが高濃度乳房という報告もあります。若年、閉経前に多く、閉経後でもホルモン補充療法をしている方によく見られます。」

「不均一高濃度は、約50%を占めます。40〜50代にかけて多いのですが、乳がん罹患率の高い年代でもあり、慎重な判定が必要です。」
「散在性は約30%を占め、乳腺は線状に認められるだけです。脂肪性は約10%で、乳腺組織のほとんどが脂肪に置き換わっています。散在性、脂肪性は、中年から高年に多く、いずれも比較的容易に異常が見つけやすいです。」

「やはり病変の発見が難しい場合があることです。また、脂肪が多い乳房よりも乳がんを発症するリスクが高いです。乳腺は女性ホルモンの影響を受けますので、白く写っている乳腺はしっかりホルモンが出てきているということ。閉経後であっても局所でホルモン

濃度が高いことを意味します。乳がんは女性ホルモンの影響を受けて発症しますので、高濃度乳房はリスクが高いと言えます。」

「高濃度乳房と分かったら。」
「超音波検査が勧められます。身体にほとんど負担がかからず、比較的短時間で検査ができ、診断精度も優れています。特にマンモグラフィでは描出しにくい、やわらかな病変を検出できます。」

「一方、マンモグラフィは、超音波検査では描出困難な石灰化や構築の乱れといった所見をつける上で優れています。特に早期の乳がんは石灰化で見つかる場合も多く、病変の早期発見に有用です。高濃度乳房では超音波検査を併用することで、見落としの可能性を減らせます。なお、当院では高解像度の断層画像を得られるトモシンセシスを導入しています。」

「高濃度乳房の女性が気をつけることは何ですか。」

「高濃度乳房は一つの所見であって病変ではありません。過度に心配せず、自己触診や定期的な検診を続けることが最も重要です。」

「国は40歳以上の女性にマンモグラフィ検査を推奨していますが、受診者には異常の有無だけが通知されています。米国と同様に高濃度乳房との判定結果を通知する体制について、検討を進めています。」